様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 6 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０４７７
研究課題名（和文）　ウィキブックによる多国間参加型日本語作文授業のデザイン
研究課題名（英文）　Wiki technology for online collaborative writing in a Japanese language class
研究代表者
鈴木　庸子（SUZUKI　YOKO）
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号：００２１６４５９

研究成果の概要（和文）：留学生に対する中級レベルの日本語教育において Wiki テクノロジーを利用した作文の授業をブレンド型学習の形式で実践した。作文の課題は大学生の「日本に対するイメージ調査」を基軸にしたグループプロジェクトのレポート共同執筆である。3 学期間にわたる実践で授業デザインの試行錯誤と改良を試み、必要な支援を考察した。留学生がプロジェクトワークとレポートの共同執筆を通して得た学び―他国についてのイメージはメディアを通して作られがちである、イメージは実地に見聞することで変化する、イメージは個人の経験から形成される等―を確認した。

研究成果の概要（英文）：This study was to explore possibilities of wiki technology in promoting collaborative writing and editing in a multicultural Japanese language class. A wiki-based collaborative writing task was first designed as a core part of a research project titled 'Image of Japan/Tokyo" and implemented in a Japanese language class. Scaffolding strategies were applied to support students' wiki-based collaborative activities. Data were collected from a student survey, interviews and instructor's observations. Results show that a wiki played a valuable role in collaboration but at the same time created different challenges to students with different learning style or strategies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	300,000	90,000	390,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：教育工学、日本語教育
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：Wiki　ブレンド型学習　協働学習　スキャフォールディング　日本語教育　作文

１．研究開始当初の背景

(1)Web2.0 テクノロジーの利用

日本語教育の分野でも Web2.0 を利用する試みは急速に進んでいる。2007 年８月にハワイで行われた第４回「日本語教育とコンピュータ」国際会議（Castel/J in Hawaii, 2007

http://castelj.kshinagawa.com/）において全 70 件の発表はほとんどがオンラインの教育方法に関連するものであり、その中で Web2.0 テクノロジーを利用したものは 10 件であった。佐藤ら（2007）は日本語コースの中で Wiki,ブログ、ポッドキャストを利用して作品を完成する課題を与えた実践を報告し、ハリソンら（2007）は Web2.0 の利用は、ヴィゴツキーらが提唱する社会構成主義をオンライン上で実践するものであるとの認識からその利用に関する研究を進めている。その他にポッドキャストの利用４件、ブログの活用３件、スカイプ１件である。Web2.0 テクノロジーは、構成主義的な参加型の学習を実現できると言われ、中でも Wiki は経済的な負担なしに、個人が発信者となって「書き物」を公開し、それを通してコミュニケーションを行い、共同作業として一つの作品を創造することができる(Landin, 2008)。これは語学学習にとって魅力的な学習環境となる。

(2)作文教育の変化

日本語の作文教育や文章表現の教育の動向を見ると、「読み手を意識せずに書き、現実に読む相手は評価者である日本語の先生である」という作文教育の概念はくずれつつある。習得途上にある外国語であっても「書く」ときに真の読み手を意識するべきだという認識は奇抜な考えではなくなっており（小川 2007)、クラスメートを読み手として書くブログのプロジェクト、母語話者とのメール交換は前述した国際会議の発表を見ても高い頻度で実践されていることがわかる。また日本語の授業で書いた作文を実際に新聞に投稿することも行われている。

(3)高等教育における国際理解教育

大学に外国語課程が取り入れられ、多くの大学が交換留学の制度を設けているのは、国際的な社会を担っていける若者を養成することが一つの目的である（江渕 1997)。日本語教育における「国際理解教育」としての側面は、日本語母語話者と学習者との相互交流によることが多く、オンラインによるメール交換やテレビ会議、対面によるビジターセッションなども実践されている（鈴木 2005、2007)。同時に各国からの日本語学習者が集まる「日本語の教室」においても、オンラインでつながった海外の日本語学習者同士の交流からも国際交流が生じる。そこには「他文化を理解する」「自文化を発信する」「交流の体験」という要素が含まれるからである。

２．研究の目的

以上に述べたことからわかるように、Web2.0 テクノロジーを日本語作文教育に生かして、構成主義的で参加型の課題を実践することは、作文教育の面からも国際理解教育の面からも自然な流れである。そこでこの研究では、海外と日本国内の日本語学習者を結ぶ、Wiki を利用した授業デザインの開発を計画した。「国際理解」という目的の達成のためにメディア等を通して形成したイメージについて洞察できるよう「日本のイメージと日本の常識」を当初のテーマ（学習内容）に策定した。

具体的には、留学生に対する中級の日本語教育の中で Wiki テクノロジーを利用した作文教育をブレンド型学習の形式でデザインし実践した。実践にあたって研究課題として明らかにしようとしたことは次の４点であった。

(1) 作文能力

Wiki を利用した共同執筆は学習者の作文能力の向上とどのようにかかわるか。

(2) 学習過程の文化差

Wiki を活用した参加型学習の過程は文化によりどのように異なるか。

(3) テーマの妥当性

学習者の日本へのイメージは Wiki への参加によってどのように変化するか。その変化は「国際理解教育」の目的に合致しているか。

(4) 授業のデザイン

参加型学習、構成主義的な学習環境を提供するために、どのように Wiki を日本語の作文教育に導入し、授業をデザインすればよいか。

上記（4)「授業のデザイン」に関しては研究の進展の中で次のリサーチ課題を策定した。①Wiki の利用におけるスキャフォールディング・ストラテジーによって学習者の協働学習が促進されるか。②学習者は Wiki への執筆を楽しんで行うか。③Wiki 利用の中に統合されたスキャフォールディングおよび動機づけのストラテジーは協働学習における学びを促進するか。

３．研究の方法

この節では上記の研究目的のうち「(4)授業のデザイン」の研究課題に関して述べる。

(1) 実践を行ったコースと授業の全体像

Wiki を利用した授業の全体像は以下のとおりである。

・対象コース：リベラルアーツ教育を主眼とする東京の小規模大学の日本語コース。主に世界各地からの短期留学生を対象とする。

・コースの目的：「読み書き聞き話す」の 4 技能を総合的に扱うアカデミックジャパニーズ。コース内容に日本語によるリサーチスキルの習得を含む。

・実践授業時期と期間：実践授業は 2008 年 9 月から 2009 年 6 月までの間の 3 つの学期に行った。コース全体の授業コマ数は週 10 コマ×9 週間である。週 10 コマの授業内容の基

本的なパターンは以下の通りである。

	1コマ目	2コマ目
月曜日	漢字	文法
火曜日	語彙	読解
水曜日	読解	討論
木曜日	作文	聴解
金曜日	リサーチスキル（プロジェクトワーク）	会話

授業時間数：Wikiを導入したコマはで週1コマ（70分）×9回　（約10時間）。
課題：リサーチスキルを目指すプロジェクトワークの中でアンケート調査とその最終レポート作成を課題とした。この最終レポートをWikiによる共同執筆とした。
グループプロジェクトの授業内容：プロジェクト趣旨説明、「「東京」のイメージ」＊（モデル文）の読解、オンラインで記事執筆練習、アンケート調査実施、Wikiへの執筆、意見交換と編集、内部での公開、口頭発表。
教材：授業内容にそって必要な教材を作成し、オンラインまたは紙媒体にて配布。
学習評価方法：ポートフォリオによる学習過程、最終レポート記事を評価。
学習者：3つの学期でそれぞれ27人（アメリカ、ヨーロッパ、韓国、日本国籍の帰国学生）、17人（アメリカ）、13人（アメリカ、イギリス、韓国、フランス）である。身分は学位請求を目的とした4年本科生、1年間滞在の短期留学生および研究生、大学院生が含まれている。
＊「「東京」のイメージ」出典：稲垣滋子『日本語の書き方ハンドブック』(1985) くろしお出版　65-66頁

(2)リサーチデザイン
　この研究は実践的な研究として、Nunan（1990）やCole（2009）の提案する次の5つのステップをサイクルとして実践する方法をとった。①計画、②実践　③評価　④省察　⑤フォローアップである。①の計画の段階では、学習者の協働学習とプロジェクトワークへの積極的な参加を促すためのツールとして、Wikiテクノロジーを採用することを計画した。②のステップでは、文献研究の結果に基づき、スキャフォールディングと動機づけの教授ストラテジーをプロジェクトワークの中に組み込んで授業を行った。③の評価のステップでは量的データとして授業後のアンケート調査および学習者の執筆状況の記録を、質的データとして授業後のインタビューと最終レポートの記事を採用し、Wikiによる共同執筆の効果や学習に与える影響を考察した。④の省察のステップでは前ステップの結果を基に授業デザインを修正し次の計画を立てた。計画の立案にあたっては、学習者が、前の学期でどのような授業を受けているかの情報も参考にした。⑤のステップでは修正したデザインを次の授業に組み込んで実践した。

(3)協働学習のツール
　第一学期目と第二学期目には大学が準備するLMSの中のmoodleに組み込まれているWiki を利用した。理由は、学習者にとってmoodleの利用はなじみがあり、利用しやすいと考えたためである。Wikiへの投稿を課題とする前に、第一学期目には同じくmoodleの中のdiscussion forumを利用して意見交換のセッションを設けた。これは、学習者にとって外国語である日本語をオンライン上に投稿するために、より形式ばらない形で「作文」を書くステップが必要だと考えたためである。第二学期目にはこのステップを省略し、Wikiへの投稿のセッションを2回設けた。このグループの学生はすでに前学期にオンライン上に投稿するブログなどを利用した経験があったため、練習のステップを外してよいと判断したためである。
　第三学期目は、moodleを使用せずにWikispaces.comと呼ばれる一般のWikiサイトを利用した。MoodleのWikiは画面が狭く、図表が載せられないなどの不便さがあり、より融通性のある一般のサイトの利用を試みた。

(4)手続き
　Wikiを利用した作文は次の5段階を含むプロジェクトワークの中の最終レポートとして課した。①調査テーマを決める　②アンケート調査によってデータを集める　③結果を集計し分析する　④「背景、目的、方法、結果、考察」の5要素を含む最終レポートを作成する　⑤レポートの内容にそった口頭発表を行う。これらの活動はすべて日本語で行った。プロジェクトワークの基本的なテーマは日本の大学生の意識調査である。第一学期目は、「イメージの比較」あるいは日本人学生の「〇〇のイメージ」をテーマとし、最後にグループごとの調査結果を比較した。第二学期目は日本人大学生の意識調査をテーマとし、とくに自分たちが抱くイメージと実際との比較を意識して行った。第三学期目は「東京のイメージ」をテーマとし、「東京の〇〇」のイメージについて自分たちの意識と日本人学生の意識の比較を行った。日本人学生として在籍校のみでなく九州の国立大学の学生を調査対象に含めたグループもあった。調査の実践、報告書公開の点で参加型・構成主義的な要素を、Wiki利用によって協働学習の要素を授業のデザインに組込んだ。

(5) スキャフォールディング・ストラテジー

具体的な授業デザインの中で、この研究で意識して取り上げたスキャフォールディング・ストラテジーは次の4分野である。①モデルを示す、②丁寧な説明と練習の機会、③積極的な参加を促す、④成果を評価しフィードバックをする。

実践にあたって使用したストラテジーの具体的な内容は次の通りである。

① モデルを示す

・プロジェクトのステップごとにワークシートを用意し、タスク形式で進める。

・「「東京」のイメージ」（読み物）を最終レポートのモデルとして読む。

②丁寧な説明と練習の機会

・Wiki に執筆する前に Forum を利用してオンラインに投稿する練習セッションを設ける。

・クラスの前で行う口頭発表の前にグループを対象とした中間発表の場を設ける。

③積極的な参加を促す

・調査の対象を日本人とし、日本語を使用する動機づけを高める。

・日本人学生を相手に対面のグループディスカッションを行い、調査結果の中間報告と意見交換の機会を設ける。

・最後に口頭発表の機会を設ける。

・Wiki 上の最終レポートは公開される。

④学習成果の評価とフィードバック

・最終レポートのほかに、プロジェクトの各ステップへの参加や提出物に対して評価を出す。

・各ステップでの参加や提出物に対してフィードバックをする。

(6)データ収集

以下の資料を研究データとして収集した。

① Wiki 上への投稿・編集の記録

② Wiki を利用して執筆した最終レポート

③ 口頭発表に際してのピアレビュー

④ 授業後のアンケート調査

⑤ 授業後のインタビュー調査

４．研究成果

(1)作文能力

Wiki 利用と作文能力の向上の関係については、ポートフォリオおよび最終レポートの分析を継続中である。分析にあたっては、能力の査定を正確かつ公平に行うためのルーブリックを策定することが重要である。そのために、最終レポートから代表的なものを 4 点抽出し、日本語教育の専門家４名による外部評価を行った。その結果、日本語中級の中盤レベルにおいて調査研究レポート執筆の成果を評価する難しさが明らかになった。研究調査としての内容の創造的側面、内容を読み手に訴える文章構成力と表現力、語彙の豊かさ、文法や表記の正確さなどルーブリックに載せる項目については合意が得られるがその達成度をどのようにランクづけることができるか、共通の判断基準を検討することが必要であり、分析の継続が今後の課題である。

(2)学習過程の文化差

Wiki テクノロジーを利用して共同執筆する課題に対する文化差については、文化的背景の違いによって学習者をグループにまとめることが現実的でなかったために研究としての調査は行わなかった。学習者は世界各地から訪れているうえ、学生の出身国がヨーロッパや北米であってもアジア系であったり、逆にアジア圏学習者であっても親の仕事で世界各国を移動していたり、学習者の生育環境は多様であった。ただし、学習者の観察を通しての省察として、Wiki テクノロジーの利用と共同執筆に対する積極性や受け止め方には次のようなことがらが影響していたと考えられる。①留学前の母校や高校までに受けた教育経験から来る学習スタイルや学習ストラテジー、②留学への期待と成績の圧力、③日本語力。

① 留学前に受けた教育の影響

留学の前から IT リテラシーが身についている場合は的確な時期と場所に投稿ができ、図表なども完成度の高いものを短時間で作成できる様子が観察された。母語でオンラインコミュニケーションが好きな学習者は、外国語である日本語でそれができることに好感をもって喜んでいる様子が見られた。また学習ストラテジーとして、タイムマネージメントや教員のオフィスアワーの利用は学習者によって違いが大きかった。これらが上手にできる学習者は、効率よく無難に作業を進めることができるのに対し、時間の使い方が下手なメンバーが含まれると、グループ作業の進捗に影響を与え、グループダイナミクスにも影響した。留学生生活は、授業時間も週 16～19 コマと多い上に、日本語授業の宿題、学生のクラブ活動への参加、アルバイト・インターンシップ等と、多忙である。タイムマネージメント力の違いは、グループワークや共同執筆作業を課したときに、積極的な協力が成功するかどうかの大きな要因となった。

② 留学への期待と成績の圧力

成績の圧力が強いかどうか、つまり奨学金や将来の大学院進学などのために「A」や「B」などの良い成績を取らなければならないかどうかは、日本語授業の課題にかけるエネルギーを左右する。この点は母校の成績制度とも関係が深く、日本語の成績が母校の成績に反映するかどうかも学習者の学習過程に違いが現れる。成績が重要か、それともクラブ活動や日本での生活経験を重視するか、学習者によって比重のかけ方が異なるが、その比重のかけ方が極端に異なる場合には、グルー

プメンバーの間に摩擦を生じることがある。
③日本語力
Wiki への投稿回数や関わり方の積極性、ほかのメンバーの書いた文章の校正や編集作業は、日本語力の高い学習者で頻度が高かった。日本語読解力が不十分な場合、自分の投稿で手一杯で、ほかのメンバーの寄稿を読む力が足りず、コメントを加えたり編集したりする余力がなかったと考えられる。

(3)テーマの妥当性
「大学生の意識調査」という大きなテーマのもとで、「東京のイメージ」「日本のイメージ」を取り上げたり、学習者が自由にテーマを選んだりするプロジェクトワークを行ったが、このテーマは、表面的な日本の姿から一歩奥の日本を知る機会としても、中級レベルの日本語力で行える調査である点でも適切であった。また後述するように、国際理解の観点においても望ましい気づきや学びを学習者から引き出すことができた。ただし、国外の日本語学習者と結んで協働のプロジェクトとして実践するためには別の工夫が必要であった。その理由は、海外の学習者の興味関心と、「大学生の意識調査」「イメージ」のテーマが合わなかったことである。海外の日本語学習者は、日本のイメージについて考察するよりも、「日本の大学生は何をしているのか」「何が好きなのか」「将来何をしたいのか」「東京でおもしろいところはどこか」など、具体的な情報を欲している傾向が見られた。そのため、今回の授業実践にあたってはテーマのすり合わせが間に合わず、海外との交流はいったん断念する形になった。
日本滞在の留学生にとっては「意識調査」のテーマは、最終レポートや口頭発表にあたってのピアレビューの記述に、「先入観への気づき」「イメージの形成過程への気づき」「日本人・日本文化に対する発見」が現れており妥当性のあるテーマだったと考えられる。次のような例が挙げられる。【イメージの異同】「グループ C の(メンバーが抱く)イメージは・・全部同じではありませんけれども・・８０％は同じようです。」「(同じアメリカ人同士で日本に対するイメージが異なることを述べたあとで) 私たちはアメリカ人だが趣味が違うので３人は違うテレビや映画を見た。それに日本に住んでいる（間）の経験が違う。だから人によって違う日本についてのイメージを持っているのだ」【メディアの影響】「イメージと言っても日本人には簡単ではないです。持っているイメージはテレビや映画の影響が多いです」【イメージと実際の違い及び変容】「アメリカの細かい文化や日本の細かい文化はそのところまで行かなければ具体的に分ることはできないとグループは考えた」「グループの全員の中で一番賛成できる意見は、日本に着いた後一般的なイメージが変わってしまったということです。ステレオタイプの中で正しい印象もありますが本当の日本はやはり生活の中でしか感じません。外国に住んでいる人の世界観の固定観念はだんだんなくなっていくと考えています」。
授業者の期待を超えた展開として「それぞれの考え方が違う。それはメディアから来ていると思うが文化的な理由もあるか考えるとおもしろい。人はステレオタイプについてもステレオタイプがある。日本人の EU のイメージは自分が予想していたより知的で広かった。色々な文化のイメージがあるがみんな人間だ」と思考を発展させている例や「ステレオタイプは悪いのか。メディアを通してイメージを持つことは悪いのか」という問題提起、「イメージは複雑な思考であり単語で表すことはできない」という抗議があった。これらの観点や議論を生かすように授業を展開出来れば、さらに学びの質を高められたと考えている。
Wiki による共同執筆によって「日本イメージがどのように変化するか」という研究課題は、学習者が現実に日本に滞在しており、学習者をとりまく環境からのイメージの変化と執筆活動による変化を区別することは本研究の範囲では不可能であった。しかし日本滞在によってイメージが変化することを日本語で言語化する例が見られ、状況のメタ認知を促進したと考えられる。
このような学習者が得た発見や気づきは国際理解教育の観点から成果があったと考えられる。

(4)授業のデザイン
この研究では Wiki テクノロジーを利用した中級日本語の授業とそして、図１に示す授業デザインのモデルを開発し実践した。図中の水色で示したステップで Wiki を利用し、①②③④で示した活動は、「３．研究方法 (5) スキャフォールディング」で記したスキャフォールディングの４分野に対応している。
「授業のデザイン」のリサーチ課題に対する省察は以下のとおりである。①Wiki 利用におけるスキャフォールディングと協働学習の関係のうち、最終レポートのモデルの提示は文体など形式の完成度を高めるために役立ったが学習者のエネルギーが形式的な編集作業に向けられ、データの分析や考察から目がそらされる危険も観察された。逆にモデルの提示が不十分に思われたグループで形式的な未完成さが目立つものの、創造的で興味深い考察を展開したグループも見られた。モデルの提示にあたっては形式的な模倣に陥らないよう、学習者の創造性を引き出す配慮が必要である。日本人学生を含むグループ

で中間報告を行ったことは、学習者に自信を与え、最後の口頭発表時の緊張をやわらげる効果があったと思われる。②Wiki の楽しさについては、グループ内の人間関係と IT リテラシーの習熟度の影響が強かった。IT リテラシーが高く、Wiki 上のコミュニケーションと人間関係がうまくいっているグループ、IT リテラシーが低くても次第に習熟していったグループは Wiki の執筆を楽しむことができた。③Wiki 上の最終レポートに見られた学びの様子は「(3)テーマの妥当性」に紹介した。積極的な参加を促すスキャフォールディングおよび動機づけは、日本人と直接接触する課題（アンケート調査と中間報告）であった。最終レポートが Wiki 上に公開されるものであることと協働学習による学びの関係は今後の課題である。ほかに協働学習には「時間管理能力、健康管理、口頭およびオンラインのコミュニケーション能力、オフィスアワー利用など教師への接近力、成績圧力の処理」などアカデミックスタディースキルが関係することが観察された。

参考文献

佐藤慎司、深井美由紀、田口伸子 2007「日本語教育と文化：テクノロジーを用いた参加型学習」『Castel-J in Hawaii 2007 Proceedings』 59-62

リチャード・ハリソン、實平雅夫、島田徳子、岩崎良美、ジョナサン・バント 2007「Web2.0 による日本語学習環境」『Castel-J in Hawaii 2007 Proceedings』 147-150

『Castel/J in Hawaii 2007 Proceedings』（第 4 回日本語教育とコンピュータ国際会議予稿集 2007. 8.3-5 於ハワイ カピオラニ コミュニティ カレッジ）

小川貴士編著 2007『日本語教育のフロンティアー学習者主体と協働』

江渕一公（1997）『大学国際化の研究』玉川大学出版部

鈴木庸子（2005）「日本人学生と留学生の交流と国際理解教育―授業外活動「ＺＡＤＡＮＫＡＩ」の意義－」『ＪＬＥＭ １０周年記念論文集』30-41

鈴木庸子（2007）「日中間のインターネットによる合同授業」『Castel-J in Hawaii 2007 Proceedings』227-228

Lundin, R. (2008). Teaching with Wikis: Toward a Networked Pedagogy. *Computers & Composition,* 25(4), 432-448.

Nunan, D. (1990). Action research in the language classroom. In J. Richards & D. Nunan (Eds.), *Second language teacher education* 62-81. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Cole, M. (2009) Using Wiki Technology to Support Student Engagement: Lessons from the Trenches, *Computers and Education* 52 (1): 141-146.

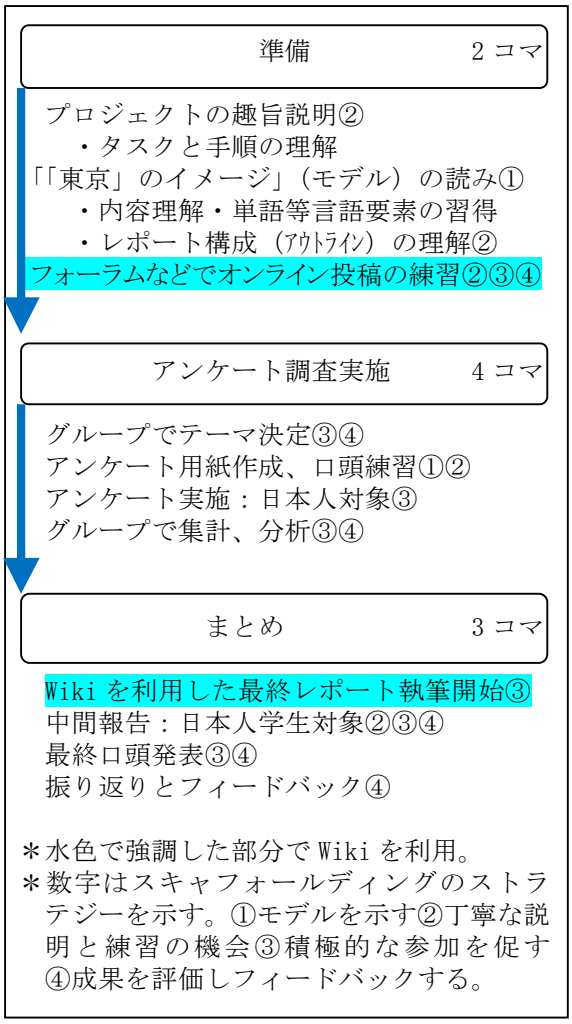

図1 Wiki を利用した協働学習の授業デザイン

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）

① 鈴木庸子・鄭仁星「「東京のイメージ」プロジェクト―Wiki を利用した中級日本語授業の試み―」、第 20 回小出記念日本語教育研究会、2011 年 7 月 2 日、国際基督教大学

〔図書〕（計０件）

＊2011 年度に２件の雑誌論文投稿を予定している。

６．研究組織

(1)研究代表者 鈴木 庸子（SUZUKI YOKO）
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号：00216459

(2)研究分担者 鄭 仁星（JUNG INSUNG）
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：90372929

(3)連携研究者 なし